

2006.7.4 日本酒を楽しむ会 於 麗人酒造で開催

河合曾良をほんの少しご紹介

河合曾良と江戸時代も超有名人松尾芭蕉

松尾芭蕉の不朽の名作「おくのほそ道」の名場面、山中温泉で曾良が体調を崩して芭蕉との同行を中断して先に出発するときの一節。

《曾良は腹を病みて、伊勢の長島といふところにゆかりあれば、先たちて行くに、

行き行きて倒れ伏すとも萩の原 曾良

と書き置きたり。行く者の悲しみ、残る者の憾み、隻鳧(せきふ)の別れて雲に迷ふがごとし。予もまた、

今日よりや書付消さん笠の露 芭蕉)

河合曾良は俳人??

「おくのほそ道」の旅に同行したことで、俳人河合曾良としての印象が強いようですが、江戸時代の俳諧に詳しい山田敦夫先生(諏訪市双葉ヶ丘)によると、まっとうな句集や作品を残していないため、また、芭蕉の他の弟子との関係が薄かったこともあり、俳諧の世界では重きを置かれていない人物らしい。

確かに、高校古典の参考図書として使われている「詳細国語総覧(東京法令出版刊)」には、芭蕉の同行者としてのみの紹介で、俳諧の文学史に登場しない。

現代に河合曾良の名が残るのは、故 原博一氏の研究によるところが大きい。原氏は、南信日日新聞(現長野日報社)勤務時代に河合曾良の生涯について研究・執筆連載。定年退職後も河合曾良生誕三百五十周年(1999年)特別展企画協力や講演活動をされた他、旧壱岐郡勝本町、旧桑名郡長島町との友好関係を推進した。2001年他界後、奥様が遺志を継ぎ「旅びと河合曾



曾良は、芭蕉との交友ぶりや、「おくのほそ道」を同行・行脚したことで(俳人)一筋の人生を送ったように短絡評価されがちであるが、実像は違う。

神道を身につけ、地誌に精通し、文学の素養豊かな人、そしてなにより、当時「東西南北の人」と称されたごとく、行動的で実地踏査を身上とする旅の実践家であった。(中略) 江戸出発から三ヵ月後の宝永七年(1710)5月22日。62歳の曾良は九州と朝鮮半島の間、壱岐島で旅に果てる。曾良の最期は、しかし壱岐島死没の定説にとどまらない。

対馬死没説あり、本州榛名山ふもとに生存していたとする説さえあって、旅びと曾良の生注は今だに『旅』に終止符を打とうとしないのである。

良の生涯」(長野日報社刊)としてまとめた。

全国の曾良ファンの愛読書となっている。

「おくのほそ道」を支えた曾良

芭蕉の代表作「おくのほそ道」の中で、自分の句を五十句、弟子である曾良の作品を十一句引用している。これは、かなりの高い比率で、他の「野ざらし紀行」では、芭蕉四十三、弟子の千里(ちり)は二句。「笈の小文」では、芭蕉五十三、弟子の杜国(とこく)は四句。また、「おくのほそ道」の文中で曾良の博識、人柄を紹介しており、旅の道先案内人として、「人」としての曾良への感謝が込められています。

この旅で曾良の残した随行記録は、芭蕉研究の貴重な資料として現代に残っている。曾良は、大変な勉強家で、伊勢長島にいた時期に学問を積んだ。将軍からも厚い信任を受けていた「吉川(きっかわ)神道」の吉川惟足に入門しようと上京。かなり広範囲の学問を身に付ける。知遇の縁で芭蕉と出会い、奥州へ旅だった。

(参考:「旅びと曾良の生涯」原博一 長野日報文藝叢書2003)

(河合曾良研究家 原 博一)



今回の会場は、

麗人酒造

創立1789年 寛政元年建立の大黒柱が、松尾大社の銘とともに現存しており、200年余りの歴史を刻んでおります。「麗人」とは戦後に麗人の如き酒を醸したいという先代の願いをこめて命名しました。俳人 河合曾良の生誕地。
([場所はこちら](#))

今回のお酒は、

諏訪 & 京都

今回のトピックは、

『ほんの少し河合曾良に出会って、俳句を楽しみました』

どんな様子だったの？

当日、開始時間が近づくにつれてお客さんがぞくぞくと集まってきました。

今回は麗人さんはビールも醸造しているので、ウェルカムドリンクとして**諏訪浪漫ビール**を到着したお客さんに出しました。初のこころみですが、これはなかなかよかったです。さすがはリーダー。

ビールを造っている蔵は諏訪では麗人さんのみだったのでさらによかった！！

そして会はずじまり、麗人、京都の酒と続き料理も好評のうちに中盤へと向かいます。そこで麗人の社長さんからサプライズな一品！！**20年純米古酒の登場！** 熟成酒を古くから取り組んでいる麗人酒造さんならではの一品です。

20年、昭和60年醸造ですよ。昭和のお酒なんてそうめったに飲めないですよ！！色は琥珀色。香はもう老香とかそういったものではなくてます。日本酒とはまた別のもので感じてました。(笑)でも、とてもやさしい感じで食事に合いそうなものでした。興味のある方は蔵元まで・・・。

で、会はまだまだ続き、今回は俳句を詠みます。お酒ははいついていてもみなさんどんどんと一句でてくるのですね～～。いい作品が次々と飛び出しました。発表すると歓声がおこり盛り上がりもよかったです。こんな感じでイベントが盛り沢山の日本酒を楽しむ会でした。お客さんも楽しんでくれたみたいでとても嬉しいです。

今度は二ヶ月後の九月です。(レポート:サブリストッフ ごり)



河合曾良の略歴

(参考: 「旅びと曾良の生涯」 原博一 長野日報文藝叢書2003)

長崎県 壱岐市 (勝本町)

1710 壱岐島風本 (=壱岐市勝本町)
で永眠 (62才)

* 諏訪市と旧壱岐郡勝本町は、河合曾良の生誕地と終焉地というきっかけで友好を深める。勝本町の合併により壱岐市となり、2005年10月諏訪市と姉妹都市となる



長野県 諏訪市【生誕地】

- 1649 下桑原町 (=諏訪市諏訪2)、高野七兵衛長男として出生。母は河西謙内一孝の娘。幼名与左衛門。幼児、近所の母の里、錢屋河西家に引き取られる。間もなく、伯母の嫁ぎ先で中州福島岩波家の養子となる。岩波庄右衛門正字を名乗る。
- 1660 養父、養母が相次いで亡くなる。真言大智院在住の縁者、第四世住職・深泉良成 (叔父?) を頼る。(12才)
- 1702 54才で行脚の途中郷里に立ち寄る

三重県 桑名市 (長島町)

- 1668 長島藩松平良尚に仕官。河合惣五郎と称する。(河合性は、河西氏が武田信玄に使え甲斐にいた頃の性とされている?) (20才)
- 1676 「曾良」の俳号で初句、「袂から春は出でたり松葉錢」
- 1681 江戸に出て「吉川神道」に入門
- 1683 松尾芭蕉と出会い、師事
- 1689 「おくのほそ道」の旅に出発 (41才)



河合曾良像
(立石寺・山形県)



phot by KEAJI ,edit by TOCO